

令和元年5月20日現在

機関番号：10101

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2017～2018

課題番号：17H06480

研究課題名（和文）ルカーチ『ハイデルベルク美学』の翻訳と註解：その成立と影響の思想史的研究

研究課題名（英文）Japanese Translation and Commentary on Lukacs' Heideberger Aesthetics

研究代表者

秋元 由裕（AKIMOTO, Yusuke）

北海道大学・文学研究科・専門研究員

研究者番号：20802672

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究計画は、ルカーチ・ジェルジュ初期の教授資格申請論文『ハイデルベルク美学1916-1918』の翻訳作業を進めると共に、その思想内容について平易かつ詳細な注釈を作成することを目的とする。その際に目指しているのは、（1）テキストの思想史的背景（ドイツ観念論、新カント主義、現象学等々）を明らかにし、（2）テキストがその著者自身の思想形成過程に占める位置を明らかにし、（3）関連する現代思想に対してテキストが及ぼす影響史を明らかにする、そのような質を有する注釈である。作業を進めるにあたっては、テキストの理解について国内外の研究者と討議しながら、最新の研究動向を反映させる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究計画は、ルカーチ・ジェルジュによる未完の教授資格申請論文『ハイデルベルク美学1916-1918』を邦訳しつつ、その思想内容について詳細な注釈を作成することを目的とする。従来の研究は専ら「新カント主義」的側面にのみ着目してきたが、この美学には『歴史と階級意識』を先取りする社会哲学が明確に刻み込まれている。とりわけ『美学』第一章「美的規定の本質」において明らかにされた「美学の現象学」構想に着目することで、ルカーチが美的経験の内に「革命的実践」の範型を見出していたことが明らかになった。研究計画年度の終了後にも翻訳と註解作成の作業を継続し、邦訳の出版へと準備を進めているところである。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research project was to translate Lukacs' Heideberger Aesthetics (1916-1918) in Japanese and besides to make a commentary on it. Through my interpretation, it should be clarified the historical background of the text at first, which is mainly composed by the tradition of New Kantianism and Phenomenology. Second I investigated how the text holds its own position in the process which had formed the originality of Lukacs, especially the internal connection between "Aesthetics" and "History and Class Consciousness" (1923). Also the influences on the other contemporary philosophers, for example H. G. Gadamer or H. R. Jauss are referred in my commentary on third chapter of Aesthetics.

研究分野：哲学・社会思想史

キーワード：ルカーチ ハイデルベルク美学論稿 美学の現象学 価値哲学

1. 研究開始当初の背景

ルカーチ・ジェルジュ（Lukács György, 1885-1971）は晩年、ヘラー・アーグネシュをはじめとする弟子たちに対して、自らがかつてドイツ・ハイデルベルクで執筆した一連の美学体系草稿を手渡し、それが出版に値するものか否かを検討するよう依頼した。そして彼の没後、新たに発見された別の草稿をこれに加え、マールクシュ・ジェルジュの編集によってルフターハント社から公刊されたのが、『芸術の哲学 1912-1914』ならびに『美学 1916-1918』と題された、いわゆる「ハイデルベルク美学論稿」（Heidelberger Schriften zur Ästhetik）である。この両論稿の冒頭で提起される問い、「芸術諸作品が存在する——それらの作品はいかにして可能であるのか？」はマックス・ヴェーバーに強い印象を与え（講演『職業としての学問』）、そしてルカーチはヴェーバーの推薦を背景にして『美学』で教授資格申請を試みながらも、母国ハンガリーにおけるプロレタリア革命への参画を理由にして結局はその体系の完成を放棄してしまった。

このような経緯からして、とりわけ『美学』は、ルカーチにおける美学から政治への転回を解明するためのこの上ない素材であり、そしてまた後の代表作『歴史と階級意識』（1923年）における物象化批判の背景にある実存的・思想的基盤を究明するためにも不可欠のテキストである。にもかかわらず、ハイデルベルク美学論稿を積極的に活用しようとする試みは、現在のところ数冊の研究書のみにとどまっている。こうした停滞が生み出されたひとつの根拠は、従来の解釈が美学論稿の思想内容を専ら「ジメルのな生の哲学から新カント主義への移行過程」として表層的に紹介し、このテキストの思想史的意義を十分に示せなかったからである。

これに対して近年、コンスタンティノス・カヴォウラコスやリチャード・ヴェスターマンをはじめとする若手の研究者たちが、ハイデルベルク美学論稿に基づいてルカーチの政治的転回を明らかにすることの重要性を提起しはじめている。研究代表者・秋元もまた博士論文『初期ルカーチにおける内在と超越の問題：ハイデルベルク美学論稿研究序説』（2017年）において同様の方向性を示してきたところであり、その成果を反映させて『ハイデルベルク美学』の翻訳と注解を作成することが、本邦での研究に一定の貢献を果たすものと考えた。

2. 研究の目的

そのような展望のもとで、本研究計画はルカーチ・ジェルジュ初期の教授資格申請論文『ハイデルベルク美学 1916-1918』の翻訳作業を進めると共に、その思想内容について詳細な注釈を作成することを目的とする。その際に目指したのは、(1) テキストの思想的背景（ドイツ観念論、新カント主義、現象学等々）を明らかにし、(2) テキストがその著者自身の思想形成過程に占める位置を明らかにし、(3) テキストが関連する現代思想（主にフランクフルト学派）に及ぼす影響史を明らかにする、そのような質を有する注釈である。作業を進めるにあたっては、テキストの解釈について国内外の研究者と討議しながら、最新の研究動向を反映させてきた。

3. 研究の方法

『美学』の翻訳にあたっては、これまでに作成した部分訳を改良させつつ、本研究計画期間全体にわたって継続的に作業を進めた。訳文については、『芸術の哲学 1912-1914』の邦訳者である高幣秀知氏（北海道大学名誉教授）に定期的な点検を依頼し、質的向上を図ってきた。

また翻訳と同時並行して執筆する注釈では、(1) テキストの時代背景と思想史的諸前提について、(2) ルカーチ自身の思想形成過程における位置づけについて、そして(3) 後代の思想に対する影響関係について言及した。その際には関連する二次文献を可能な限り利用して参照指示を付し、注釈それ自体の検証可能性を確保することを心がけた。

この間にはハンガリー・ブダペストにあるルカーチ・アルヒーフを訪問し、『美学』のオリジナル草稿を参照することによって、ルフターハント社版テキストに孕まれている編集上の問題点を解決することができた。またその只中では当地の研究者メシュテルハーズィ・ミクローシュ博士らと意見交換を行い、本研究計画の成果をドイツ語論文へとまとめ上げるにあたっての助言を受けた。

4. 研究成果

研究計画第一年度中に『美学』第一章「美的措定の本質」の翻訳を終え、第二年度には「美の論理的・形而上学的理念」以降のテキストに取り掛かったものの、本研究計画期間中に訳文を最終的に確定させるには至らなかった。計画終了後も作業を継続しているところであり、全体の訳文ならびに註解を完成させ次第、出版に向けた準備に入る予定である。なお註解については、以下のような論点に即して執筆を進めたところである。

(1) 『美学』の成立史

第一次世界大戦において東の間の兵役を終えたルカーチが、『芸術の哲学』における体系構想を修正するのではなくて全く新たに起稿した理由は、これまで十分に解明されてきたとは言え

ない。この問題に対して先行研究の多くは、新カント主義からの影響を指摘するにとどまっている。だがヴェーバーとラスクの助言がどれほど批判的なものであれ、彼らが一九一三年の時点で「芸術哲学」論稿の「基本テーゼ」に共感し同意していたことからすれば、ルカーチが自らの体系構想を以前とは全く異なったものに変更したのは、余りに過剰である。それ故にハイデルベルク美学論稿の改稿問題については、新カント主義的構成への変更、というより以上の解明が必要となる。

(2) ルカーチと新カント主義

『美学』のテキストがルフターハント社より Georg Lukács Werke の第 17 巻として刊行されて以来 40 年余りを経た今日なお、本格的な研究論文として評価できるのは 6 本程度にとどまっている。「ブダペスト学派」に属するマールクシュ・ジェルジュの論文 Lukács' >erste< Ästhetik: Zur Entwicklungsgeschichte der Philosophie des jungen Lukács in: *Die Seele und das Leben—Studien zum frühen Lukács*, Suhrkamp, 1977 は、現在でもなお顧みられるべき豊富な内容をもっているが、ハイデルベルク美学論稿を専ら「生の哲学から新カント主義的「二元論」への移行過程」にあるものだと捉えるその形式主義的な視点によって、むしろテキストの社会哲学的ポテンシャルを制約してしまっている。E. Weisser, *Georg Lukács' Heidelberger Kunstphilosophie*, Bouvier, 1992 によっても継承されてきたこの限界を克服するための手がかりを、研究代表者・秋元はルカーチ自身の「美学の現象学」構想の内に見出してきた。

その際に手引きとなったのは、近年出版された K. Kavoulakos, *Ästhetizistische Kulturkritik und ethische Utopie: Georg Lukács' neukantianisches Frühwerk*, De Gruyter, 2014 である。カヴォウラコスはその中で、ルカーチが「美的な妥当形式」を探求する仕方にはラスク『哲学の論理学とカテゴリー論』からの強い影響関係が認められることを、テキストに即して具体的に指摘している。この点でカヴォウラコスは、マールクシュの解釈以来強調されながら曖昧に把握されていたルカーチの「新カント主義的「二元論」なるもの」の実質を明らかにすることで、研究水準を大きく引き上げる成果を示したと言える。しかしカヴォウラコスは『美学』の哲学的諸前提を解明してはいるものの、ルカーチの美学体系の背後にある社会哲学的含意については全くのところ踏み込んでいない。そのため、ルカーチの「美学の現象学」構想についてもほとんど立ち入った言及が見られない。

これに対して本研究は、ルカーチがラスクの妥当哲学を継承していることを十分に認めつつも、むしろ「美的価値（意味）」と「存在」との二元論的構成を流動化させる志向が「美学の現象学」の核心にあることを明らかにした。そこでルカーチは、芸術作品を創造し受容する主体性がたどる行程を「存在」の美的な「意味」化として捉えつつ、そのようなものとしての「美学の現象学」を、物象化された世界の批判と変革の行程と明らかに重ね合わせている。この点を踏まえることによって、上に述べた論稿の改稿問題についても、新カント主義からの影響関係という外面的な説明より以上の分析が可能となるはずである。

(3) 『美学』の受容史

しかし実際には、「美学の現象学」を中心に位置づけるような受容の仕方はこれまで存在しなかった。主に注目されてきたのは、やはり『ロゴス』誌上に掲載された論文「美学における主体—客体関係」である。したがって本研究計画としては、受容史に関する註解を『美学』第三章に関するコメントールとして執筆してきた。その概要は以下の通りである。

一九一七年の講演『職業としての学問』の中でヴェーバーは、「現代の美学者」として「ゲオルク・フォン・ルカーチ」の名を紹介しつつ、ハイデルベルク美学論稿冒頭の問い「芸術諸作品が存在する——それらの作品は如何にして可能であるのか？」を現代美学に固有の問題提起を代表するものとして引用した。論稿の成立史に関連して既に述べてきたように、この言及は、ハイデルベルク美学論稿の「基本テーゼ」に対するヴェーバーの共感を率直に示すのみならず、このテーゼを徹底する方向において体系化を完遂するよう、ルカーチに促す意味をも含んでいたように思われる。ヴェーバーによれば、現代美学もまたあらゆる他の諸学と同様、事実性から出発してその「可能性の条件」を探究するものとして、「芸術作品が存在すべきか否かを問題にはしない」。講演の中でルカーチの美学はカントの認識論と同列に紹介されていることからして、ヴェーバーのルカーチに対する期待は、世界の「意味 Sinn」を求める「神学的態度」から美学を峻別することにあつたはずである。学の客観性は、学がそれ自らを世界の「意味」への要求から区別する価値自由な態度によって確保されるのだとすれば、ルカーチによる問題提起は、その限りではまさしく「学」の方法に準拠している。ハイデルベルク美学論稿が実際にそのような事実学の範囲に収まるものであつたのかは後に明らかとなるであろうが、いずれにせよ、芸術作品の事実性についての問いを出発点としたルカーチの美学は、作品の完結性や美的体験の瞬間性といった論点を提示したことにより、さしあたり現象学と解釈学の文脈で受容されてゆく。

そこでルカーチからの触発を明示的に表現した思想家としては、オスカー・ベッカーの名が知られている。『美のはかなさと芸術家の冒険』において彼は、ゾルガーの「美のはかなさ」という概念をルカーチの「美学における主体—客体関係」論文の諸概念と照らし合わせ、ロマン主義美学の現代化を企図している。ベッカーによれば、ゾルガーの云う美の「はかなさ」(Hinfälligkeit)こそが、「もろさ」(Fragilität)の術語によって明確に示されるべき美的なもの

の存在論的・超存在論的な基本的カテゴリー」を特徴づけるという。この「もろさ」とは、美的なものの尖端的性格 (Spitzencharakter) に由来する。徐々に歩みを進めることができる山嶺とは異なり、尖端は「断じて人を寄せ付けず、険しく聳え立っている」。この点でベッカーは、美的なものの中に「ミクロコスモス的構造」を認識したルカーチの論文を引き合いに出し、この完結性を、芸術作品が「完結された」作品である理由」として特定する。ベッカーにとってこの完結性は、「歴史的な時間性」とそこからの超越とが同時的に両立する「永遠の瞬間」という美の特性に基づくものであり、それ故にこそ「はかない」のだとされる。

だが瞬間性のこのような強調は、「芸術の真理に対する問いの再獲得」を要求するガーダマーにとって、一個の統一的な存在として解釈の対象をなす芸術作品を解消してしまう」営みに他ならなかった。彼によれば、カントの主観主義的美学にせよ、またディルタイに発する体験美学にせよ、それらはいずれも「われわれの存在を形作っている解釈学的連続性」への問いに回答していない。この点で言及されるのが、ルカーチの「美学における主体－客体関係」論文である。ガーダマーは云う、ルカーチによれば「芸術作品はただ空虚な形式にすぎず、ありとあらゆる多様な美的体験 (美的対象はそこにおいてのみ存在する) の単なる結節点にすぎないというわけである。ここからわかるように、絶対的不連続、すなわち美的対象の統一性が体験の多様性へと分解するのは、体験美学の必然的な帰結なのである」。このように「作品の統一性」が解体されることで何が問題なのかといえば、解釈学にとっての中心課題、すなわち「自己理解」の可能性が失われることである。それ故にルカーチに対する批判は、『真理と方法』第一部における主張の中心に触れることになる。ガーダマーによれば、自己理解のあらゆる仕方と同様に美的経験もまた「他者を手がかりとして」行われ、芸術作品においてこそ「他者の統一性と同一性」が示される。これに対してルカーチは美的体験における瞬間性を強調することによって、作品における他者との邂逅をつうじた自己理解の契機を決定的に欠落させているとガーダマーは考えている。「むしろわれわれは芸術作品において自らを理解するようになるのであり、言い換えれば、体験の不連続性と瞬間性をわれわれの現存在の直接性において揚棄する」。このように、作用史の伝統を強調するガーダマーにとってルカーチの美学は、芸術作品の統一性を解体する点であまりに問題を孕むものと映ったのである。

このような批判は、ガーダマー解釈学の影響下で受容美学を案出した H. R. ヤウスによって回復され、発展させられる。彼の大作『美的経験と文学的解釈学』は、芸術作品の概念に関するポッペル・レオーとルカーチとの間の差異に着目し、前者における「対話性」を高く評価することによって、後者における「モノロギ的な作品美学」を批判の俎上に載せる。ヤウスはポッペル・レオーによって起草されたテキスト「芸術についての対話」を題材に、この対話における一方の登場人物「A」をルカーチと同定し、この A が芸術作品を「完成における未完成」(in der *Fertigkeit* unfertig) として捉える点に問題点を指摘する。ヤウスによれば、「ポッペルにとって、受容者に対して開かれている芸術作品が、美学に対して美的コミュニケーションの対話性への方向を示す。ルカーチにとって、「超越論的なもの」の中へと開かれている芸術作品が、時間を超えた完全なるもののプラトンの再保険 (Rückversicherung) を美学に対して取り戻す。今やこの完全なるものは、そのモノロギ的真理において、受容者に観照的理解の役割を委ねるだけなのだ」。「芸術についての対話」における他方の登場人物「B」、すなわちポッペルが芸術作品を「未完成における完成」(in der *Unfertigkeit* fertig) と把握するとき、そこで「完成」として表象されているのは、作品にとっての受容者の存在である。作品はそれ自体だけで存在するものではなく、受容者との関係性において初めて〈作品〉として現出するという主張は、ヤウスにとって、受容美学の核心部分を取捨するものとして受け取られた。これに対しハイデルベルク美学論稿の第一試行『芸術の哲学』は、その多くの諸概念をポッペルの遺産に負いながら、芸術作品を美的価値の超時代的妥当として捉えることによって、創造者と受容者との「対話性」を過小評価するものとされる。ルカーチをこのように批判することで、ヤウスは受容美学を他者との対話性へと開かれたものとして示そうとしたと考えられる。

5. 主な発表論文等

『美学』の訳文ならびに註解の作成を目的とする本研究計画の性格から、個別の論文は発表していない。ただし研究計画年度の終了後、研究成果を反映させてドイツ語論文を執筆し、クリスティーネ・マゲルス教授 (ザグレブ大学) の編集によるルカーチ美学論集『社会哲学としての形式美学』(仮題、2019年中に出版予定) へと寄稿する運びとなっている。

[雑誌論文] (計 0 件)

なし

[学会発表] (計 0 件)

なし

[図書] (計 0 件)

なし

[その他]

なし

6. 研究組織

- (1) 研究分担者
なし
- (2) 研究協力者
なし

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。